

# 雪靈記事

泉鏡花

青空文庫



「此このくらゐな事ことが……何なんの……小兒こどものうち歌留多かるたを取りに行いつ  
たと思おもへば——」

越えちぜん前の府ふ、武生たけふの、侘わびしい旅宿やどの、雪ゆきに埋うもれた軒のきを離はなれて、  
二町ちやうばかりも進すすんだ時とき、吹雪ふぶきに行ゆきなや惱なやみながら、私わたしは——然さう思おも  
ひました。

思おもひつゝ推切おしきつて行ゆくのであります。

私わたしは此處こゝから四十里りあま餘へだり隔へだたつた、おなじ雪ゆき深ぶかい國くにに生うまれた  
ので、恁かうした夜道よみちを、十町ちやうや十五町ちやうあ歩行あるくのは何なんでもないと思おも

つたのであります。

が、其の凄じさと言つたら、まるで眞白な、冷い、粉の大波を泳ぐやうで、風は荒海に齊しく、ぐわうくと呻つて、地——と云つても五六尺積つた雪を、押揺つて狂ふのです。

「あの時分は、脇の下に羽でも生えて居たんだらう。屹と然うに違ひない。身輕に雪の上へ乗つて飛べるやうに。」

……でなくつては、と呼吸も吐けない中で思ひました。

九歳のつとを、九歳十歳ばかりの其の小兒は、雪下駄、竹草履、それは雪の凍てた時、こんな晩には、柄にもない高足駄さへ穿いて居たのに、轉びもしないで、然も遊びに更けた正月の夜の十二時過ぎなど、近所の友だちにも別れると、唯一人で、白い社の廣

い境内けいだいも抜ぬければ、邸町やしきまちの白しろい長ながい土塀どべいも通とほる。……ザ  
 ヅツ、ぐわうと鳴なつて、川波かはなみ、山風やまおろしとともに吹ふいて來くると、  
 ぐるくとまはる車輪しやりんの如ごとき濃こく黒くろずんだ雪ゆきの渦うづに、くるくと  
 舞まひながら、ふはくと濟すまアして内うちへ歸かへつた——夢ゆめではない。  
 が、あれは雪ゆきに靈れいがあつて、小兒こどもを可いと愛としがつて、連つれて歸かへつたの  
 であらうも知しれない。

「あゝ、酷ひどいぞ。」

ハツと呼吸いきを引ひく。目口めくちに吹ふきここ粉雪こゆきに、ばツと背せを向むけて、  
 そのたびに、風かぜと反はん對たいの方ほうへ眞俯まうつむ向けなに成なつて防ふせぐのでありま  
 す。恁かう言いふ時ときは、其その粉雪こゆきを、地ちぐるみ煽あふりた立てたますので、下した  
 からも吹ふきああげ、左さ右ぎゆうからも吹ふきままくつて、よく言いふことことですけれど

も、おもてむ面の向けやうがないのです。

こども小兒の足駄を思ひ出した頃は、じつ實は最う穿はきものなんぞ、とう疾の以ぜん前になかつたのです。

しかし、ごあんしんくだ御安心下さい。——ゆき雪の中をはだし跣足である歩行く事は、と都會くわいの坊ちやんや嬢ぢやうさんが吃驚びつくりなさるやうな、つめた冷いものでないだけは取柄とりえです。ズボリと踏込ふみこんだ一息ひといきの間は、つめた冷さ骨髄こつずゐに徹てつするのですが、いきほひ勢よく歩行あるいて居ゐるうちにはあたゝかな温く成ります、ほかゝするくらゐです。

やがて、六七町ちやちぐ潜つて出でました。

まだ此この間あひだは氣丈夫きちやうぶでありました。町まちの中うちですから兩側りやうがはに家いへが續つゞいて居をります。此この邊へんは水みづの綺麗きれいな處ところで、軒下のきしたの兩側りやう

側を、清い波を打つた小川が流れて居ます。尤も其れなんぞ見えるやうな容易い積り方ぢやありません。

御存じの方は、武生と言へば、あゝ、水のきれいな處かと言はれます——此の水が鐘を鍛へるのに適するさうで、釜、鍋、庖丁、一切の名産——其の昔は、聞えた刀鍛冶も住みました。今も鍛冶屋が軒を並べて、其の中に、柳とともに目立つのは旅館であります。

が、最う目貫の町は過ぎた、次第に場末、町端れの——と言ふとすぐに大な山、峻い坂に成ります——あたりで。……此の町を離れて、鎮守の宮を抜けますと、いま行かうとする、志す處

へ着つく筈はずなのです。

それは、——其許そこは——自分じぶんの口くちから申まを兼ねる次第しだいでありますけれども、私わたしの大恩人だいおんじん——いえくく恩人おんじんで、そして、夢ゆめにも忘れられない美しい人うつくの侘住居わびずまひなのであります。

侘住居わびずまひと申まをします——以前いぜんは、北國ほつこくに於おいても、旅館りよくわんの

設備せつびに於おいては、第一だいいちと世よに知られた此この武生たけふの中うちでも、其その隨ず

一いちの旅館りよくわんの娘むすめで、二十六とじゅうろくの年としに、其その頃ころの近國きんごくの知事ちじの

妾おもひぢのに成なりました……妾めかけとこそ言いへ、情なさけぶか深く、優やさしいのを、昔いにしへの

國主こくしゆの貴婦人きふじん、簾中れんちゆうのやうに稱たへられたのが名なにしおふ中なかの

河内かはちの山裾やますそなる虎杖いたどりの里さとに、寂さびしく山家住居やまがずまひをして居ゐるので

すから。此この大雪おほゆきの中なかに。



なが  
流るゝ水とともに、武生は女のうつくしい處だと、昔から人が  
いふのであります。就中、蔦屋——其の旅館の——お米  
さん（恩人の名です）と言へば、國々、評判なのであり  
ました。

まだ汽車の通じない時分の事。……

「昨夜は何方でお泊り。」

「武生でございます。」

「蔦屋ですな、綺麗な娘さんが居ます。勿論、御覽でせう。」

旅は道連が、立場でも、又並木でも、言を掛合ふ中には、屹

と此の事がなければ納まらなかつたほどであつたのです。

往來に馴れて、幾度も蔦屋の客と成つて、心得顔をしたも

のは、お米さんの事を渾名して、むつの花、むつの花、と言ひま

した。——色と言ひ、また雪の越路の雪ほどに、世に知られたと

申す意味ではないので——此は後言であつたのです。……不具

だと言ふのです。六本指、手の小指が左に二つあると、見て來

たやうな噂をしました。何故か、——地方は分けて結婚期が早

いののに——二十六七まで縁に着かないで居たからです。

(しかし、……やがて知事の妾に成つた事は前に一寸申しまし

た。)

わたしはよく知つて居ます——六本指なぞと、氣もない事です。

確に見ました。しかも其の雪なす指は、摩耶夫人が召す白い細い

花の手袋のやうに、正に五瓣で、其が九死一生だつた私の

額に密と乗り、軽く胸に掛つたのを、運命の星を算へる如く熟

と視たのでありますから。——

また其の手で、硝子杯の白雪に、鶏卵の蛋黄を溶かしたのを、

甘露を灌ぐやうに飲まされました。

ために私は蘇返りました。

「冷水を下さい。」

最う、それが末期だと思つて、水を飲んだ時だつたのです。

脚氣を煩つて、衝心をしかけて居たのです。其のために東

うきやう 京から故郷に歸る途中だつたのでありますが、汚れくさつた  
 しろがすり 白 絣を一枚きて、頭陀袋のやうな革鞆一つ掛けたのを、玄  
 んくわん 關 さきで斷られる處を、泊めてくれたのも、螢と紫陽花が見  
 とほ 透しの背戸に涼んで居た、其のお米さんの振向いた瞳の情だつた  
 せど すッ なのです。

みづ 水と言へば、せい／＼米の磨汁でもくれさうな處を、白  
 き き 雪に蛋黃の情。——萌黃の蚊帳、紅の麻、……蚊の酷い處です  
 なさけ け 雪に蛋黃の情。——萌黃の蚊帳、紅の麻、……蚊の酷い處です  
 よね ね が、お米さんの出入りには、はらくと螢が添つて、手を映し、  
 ではひ ひ 指環を映し、胸の乳房を透して、浴衣の染の秋草は、女郎花  
 ゆびわ うつ 指環を映し、胸の乳房を透して、浴衣の染の秋草は、女郎花  
 むね ね を黄に、萩を紫に、色あるまでに、蚊帳へ影を宿しました。  
 はぎむらさき き 萩を紫に、色あるまでに、蚊帳へ影を宿しました。  
 いろ 色あるまでに、蚊帳へ影を宿しました。

「まあ、汗びつしより。」



とづれ  
信さへ出来ますまい。

十六七年を過ぎました。

——唯今の鯖江、鯖波、今庄

の驛が、例の音に聞えた、中の河内、木の芽峠、湯の尾峠を、

前後左右に、高く深く貫くのでありまして、汽車は雲の上を馳り

ます。

間の宿で、世事の用は聊かもなかつたのでありますが、可

懐の餘り、途中で武生へ立寄りしました。

内證で……何となく顔を見られますやうで、ですから内

證で、其の蔦屋へ参りました。

臯月上旬でありました。

門、背戸の清き流、軒に高き二本柳、——其の青柳の葉  
 の繁茂——こゝにイみ、あの背戸に團扇を持つた、其の姿が思は  
 れます。それは昔のまゝだつたが、一棟、西洋館が別に立  
 ち、帳場も卓子を置いた受附に成つて、蔦屋の様子はかは  
 つて居ました。

代替りに成つたのです。——

少しばかり、女中に心づけも出来ましたので、それとなく、  
 お米さんの消息を聞きますと、蔦屋も蔦龍館と成つた發  
 展で、持の此の女中などは、京の津から來て居るのださうで、

少しも恩人の事を知りません。

番頭を呼んでもらつて訊ねますと、——勿論其の頃の男で

はなかつたが——此はよく知つて居ました。

薦屋は、若主人——お米さんの兄——が相場にかゝつて退

轉をしたさうです。お米さんにまけない美人をと言つて、若主

人は、祇園の藝妓をひかして女房にして居たさうであり

ますが、それも亡くなりました。

知事——其の三年前に亡く成つた事は、私も新聞で知つて

居たのです——其のいくらか手當が残つたのだらうと思はれます。

當時は町を離れた虎杖の里に、兄妹がくらし、若主人

の方は、町中の或會社へ勤めて居ると、此の由、番頭が



話してくれました。一昨年いつさくねんの事ことなのです。

——いま私は、可おそろし恐ふゞきい吹雪なの中なかを、其處そこへ志こゝろして居ゐるのであります——

が、さて、一昨年いつさくねんの其その時ときは、翌日よくじつ、半日はんいち、いや、午後ごご三時頃じごころまで、用ようもないのに、女中ぢようちゆうたちの蔭かげで怪あやしむ氣勢けはひのするのおもが思とひ取とられるまで、腕組うでぐみが、肘ひちまくら枕まくらで、やがて、夜具やぐを引ひつかぶ被つかつてまで且かつ思おもひ、且かつ惱なやみ、幾度いくたびか逡巡しゆんじゆんした最後さいごに、旅館りよくわんをふらくと成なつて、たうとう恩人おんじんを訪たづねに出でました。故わざと途中とちゆう、餘所よそで聞きいて、虎杖村いたどりむらに憧憬あこがれ行ゆく。……

道みちは鎮守ちんじゆがめあてでした。白しろい、静しづかな、曇くもつた日ひに、山吹やまぶきも色いろが浅あさい、小流こながれに、苔蒸こけむ

した石の橋が架つて、其の奥に大きくはありませんが深く神寂び  
 た社があつて、大木の杉がすらくくと杉なりに並んで居ます。  
 入口の石の鳥居の左に、就中暗く聳えた杉の下に、形はつい通  
 りであります、雪難之碑と刻んだ、一基の石碑が見えました。  
 雪の難——荷擔夫、郵便配達の人たち、其の昔は數多の  
 旅客も——此からさしかゝつて越えようとする峠路で、屢  
 々命を殞したのでありますから、いづれ其の靈を祭つたのであ  
 らう、と大空の雲、重る山、續く巔、聳ゆる峰を見るにつけて、  
 凄じき大濤の雪の風情を思ひながら、旅の心も身に沁みて通  
 過ぎました。

瞰道少しばかり、菜種の畦を入つた處に、志す庵が見えま

した。侘しい一軒家の平屋ですが、門のかゝりに何となく、むかしの状を偲ばせませす、萱葺の屋根ではありません。

伸上る背戸に、柳が霞んで、こゝにも細流に山吹の影のうつ映るのが、繪に描いた螢の光を幻に見るやうでありました。

夢にばかり、現にばかり、十幾年。

不思議にこゝで逢ひました——面影は、黒髪に笄して、雪の襦袢した貴夫人のやうに遙に思つたのとは全然違ひました。くろじゆす黒縺子の襟のかゝつた縞の小袖に、些とすき切れのあるばかり、空色の絹のおなじ襟のかゝつた筒袖を、帯も見えないくらいひきあは引合せて、細りと着て居ました。

其の姿で手をつきました。あゝ、うつくしい白い指、結立ての

品のいゝ圓鬚まるまげの、情らしい柔順な鬚すなほ たほの耳朶みくたぶかけて、雪なす項ゆき うなじが優やさしく清きよらかに俯向うつむいたのです。

生意氣なまいきに杖ステッキを持つて立つて居ゐるのが、目めくるめくばかりに思おもはれました。

「わたしは……關……」

と名なを申まをして、

「蔦屋つたやさんのお嬢ぢやうさんに、お目めにかゝりたくて参まゐりました。」

「米よねは私わたしでございませう。」

と顔かほを上げ、清すしい目めで熟じつと視みました。

私の額わたしのひたひは汗あせばんだ。——あのいつか額ひたひに置おかれた、手ての影かげばかり白しろく映うつる。

「まあ、せき關さん。——おとなにお成りなさいました……」

此これですもの、可なつかし懐さはどんなでせう。

しかし、こゝで私わたしは初はつこひ戀、片かたおもひ、戀こひの愚ぐち癡を言いふのでは  
ありません。

……此この凄すごい吹雪ふぶきの夜、不ふ思し議ぎな事ことに出であひました、其そのお話はなし  
をするのであります。

#### 四

その時ときは、四かこひ疊半ではありません。が、爐ろを切きつた茶ちやの室まに通とほ  
されました。

時に、先客が一人ありまして爐の右に居ました。氣高いばかり品のいゝ年とつた尼さんです。失禮ながら、此の先客は邪魔でした。それがために、いとゞ拙い口の、千の一つも、何にも、ものが言はれなかつたのであります。

「貴女は煙草をあがりますか。」

私はお米さんが、其の筒袖の優しい手で、煙管を持つのを視て然う言ひました。

お米さんは、控へて一寸俯向きしました。

「何事もわすれ草と申しますな。」

と尼さんが、能の面がものを言ふやうに言ひました。

「關さんは、今年三十五にお成りですか。」

とお米よねさんが先さきへ數かずへて、私わたしの年としを訊たづねました。

「三一碧さんぺきなう。」

と尼あまさんが言いひました。

「貴女あなたは？」

「私わたしは一つ上うへ……」

「四緑しりくなう。」

と尼あまさんが又また言いひました。

——略りやくして申まをすのですが、其處そこへ案内あんないもなく、づか〜と入はひつて來きて、立状たちざまに一ちよつ寸と私わたしを尻目しりめにかけて、爐ろの左ひだりの座ざについて一人にんがあります——山伏やまぶしか、隱者いんじやか、と思おもふ風采ふうさいで、もの鷹揚おうやうな、悪わるく言いへば傲慢がうまんな、下手へたが畫ゑに描かいた、奥州あうしう

めぐりの水戸の黄門と言つた、鼻の隆い、髯の白い、早や七  
十ばかりの老人でした。

「此は關さんか。」

と、いきなり言ひます。私は吃驚しました。

お米さんが、しなよく頷きますと、

「左様か。」

と言つて、此から滔々と辯じ出した。其の辯ずるのが都會  
に於ける私ども、なかま、なかまと申して私などは、ものの數で  
もないのですが、立派な、畫の畫伯方の名を呼んで、片端  
から、奴がと苦り、彼め、と蔑み、小僧、と呵々と笑ひます。  
私は五六尺飛退つて叩頭をしました。



「汽車の時間がございますから。」

お米さんが、送つて出ました。

花菜の中を半の時、私は香に咽

んで、涙ぐんだ聲して、

「お寂しくおいでなさいませう。」

と精一杯に言つたのです。

「いゝえ、兄が一緒ですから……でも大雪の夜なぞは、町か

ら道が絶えますと、こゝに私一人きりで、五日も六日も暮します

よ。」

とほろりとしました。

「其のやはり夏は涼しうございます。避暑に行らつしやい……お

宿をしますよ。……其の時分には、降るやうに螢が飛んで、此の

水には菖蒲が咲きます。」

夜汽車の火の粉が、木の芽峠を螢に飛んで、窓には其の菖蒲が咲いたのです——夢のやうです。……あの老尼は、お米さんの守護神——はてな、老人は、——知事の怨靈ではなかつたか。

そんな事まで思ひました。

圓鬻に結つて、筒袖を着た人を、しかし、其二人は却つて、お米さんを祕密の霞に包みました。

三十路を越えても、窶れても、今も其美しさ。片田舎の虎

杖になぞ世にある人とは思はれません。

ために、音信をおこたため、音信を怠りました。夢に所がきをするやうですから。……とは言い、一つは、日に増し、不思議に色の濃く成る爐の右ぎひだりひとほゞか左の人を憚つたのであります。

おとづれおんじん 音信して、恩人に禮をいたすのに仔細はない筈。雖然、下世話にさへ言ひます。慈悲すれば、何とかする。……で、恩人と云ふ、其の恩に乗じ、情に附入るやうな、賤しい、淺ましい、卑劣な、下司な、無禮な思ひが、何うしても心を離れないものですから、ひとり、自ら憚られたのであります。

わたしいま 私は今、其處へ——

「あゝ、彼處が鎮守だ——」

吹雪の中の、雪道に、白く續いた其の宮を、さながら峰に築いたやうに、高く朦朧と仰ぎました。

「さあ、一息。」

が、其の息が吐けません。

眞俯向けに行く重い風の中を、背後からスツと軽く襲つて、裾、頭をどツと可恐いものが引包むと思ふと、ハツとひき息に成る時、さつと抜けて、目の前へ眞白な大な輪の影が顯れます。とくるくとるのです。りながら輪を巻いて、巻きく巻き込めると見ると、忽ち凄じい渦に成つて、ひゆうと鳴りながら、舞

ひあが上つて飛んで行く。……行くと否や、續いて背後から巻いて來  
 ます。それが次第に激しく成つて、六ツ四ツ數へて七ツ八ツ、身  
 體の前後に列を作つて、巻いては飛び、巻いては飛びます。巖に  
 も山にも砕けないで、皆北海の荒波の上へ馳るのです。――  
 最う此の渦がこんなに捲くやうに成りましたは堪へられません。  
 此の渦の湧立つ處は、其の跡が穴に成つて、其處から雪の柱、雪  
 の人、雪女、雪坊主、怪しい形がぼツと立ちます。立つて  
 倒れるのが、其まゝ雪の丘のやうに成る……其が、右に成り、左  
 に成り、横に積り、縦に敷きます。其の行く處、飛ぶ處へ、人の  
 からだを持つて行つて、仰向けにも、俯向せにもたゞきつけるの  
 です。

——雪難之碑。——峰の尖つたやうな、其處の大木の杉の梢

を、睫毛にのせて倒れました。私は雪に埋れて行く……身動き

も出来ません。くひしばつても、閉ぢても、目口に浸む粉雪を、

しかし紫陽花の青い花片を吸ふやうに思ひました。

——「菖蒲が咲きます。」——

螢が飛ぶ。

私はお米さんの、清く暖き膚を思ひながら、雪にむせんで叫び

ました。

「魔が妨げる、天狗の業だ——あの、尼さんか、怪しい隠士か。」







# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十一」岩波書店

1941（昭和16）年9月30日第1刷発行

1975（昭和50）年7月2日第2刷発行

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2005年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

# 雪靈記事

## 泉鏡花

2020年 7月12日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>